

2度あることは…

中高宗教主事 大久保 直樹

7主なる神は、土(アダマ)の塵で人(アダム)を形づくり、その鼻に命の息を吹き入れられた。人はこうして生きる者となった。**創世記 2 章 7 節**

19その日、すなわち週の初めの日の夕方、弟子たちはユダヤ人を恐れて、自分たちのいる家の戸に鍵をかけていた。そこへ、イエスが来て真ん中に立ち、「あなたがたに平和があるように」と言われた。**20**そう言って、手とわき腹とをお見せになった。弟子たちは、主を見て喜んだ。**21**イエスは重ねて言われた。「あなたがたに平和があるように、父がわたしをお遣わしになったように、わたしもあなたがたを遣わす。」**22**そう言ってから、彼らに息を吹きかけて言われた。「聖霊を受けなさい。**23**だれの罪でも、あなたがたが許せば、その罪は赦される。だれの罪でも、あなたがたが赦さなければ、赦されないまま残る。」ヨハネによる福音書 20 章 19～23 節

1五旬祭の日が来て、一同が一つになって集まっていると、**2**突然、激しい風が吹いてくるような音が天から聞こえ、彼らが座っていた家中に響いた。**3**そして、炎のような舌が分かれ分かれに現れ、一人一人の上にとどまった。**4**すると、一同は聖霊に満たされ、“霊”が語らせるままたまに、ほかの国々の言葉で話した。**使徒言行録 2 章 1～4 節**

さて礼拝の話の前に聖書を3か所もご一緒に読んでいただきましてありがとうございました。お話のタイトルが「2度あることは…」としましたので、1回目、2回目、3回目の順で、創世記、ヨハネ福音書、使徒言行録に触れてゆきたいと思います。

それでは、まず創世記2章7節。創世記ですので旧約聖書の一番最初の書物になります。それはわたしたち人間が、創り主であられる＝天地万物の創造主であられる神さまによって造られた場面です。「主なる神は、土(アダマ)の塵で人(アダム)を形づくり、その鼻に命の息を吹き入れられた。人はこうして生きる者となった。」わたしたちは生まれる時に「オギャーっ」と言って、というか泣き叫んでと言いましょうか、「生まれたど〜ッ!」と宣言するのですが、その叫ぶことって発声＝声を出すことですので、息を吐きながら言葉が出ていくわけですね。息を吐くということは、その前に息を吸っているわけです。この世に生れ出た人生初の呼吸の瞬間。それを聖書では「神さまによって命の息を吹き入れられた」と表現します。そのように捉えるのです。信じるのです。「人はこうして生きる者となった」のです。わたしたちは生まれた瞬間から、これから様々なことを経験する人生を、神さまによって生きることが出来るものとして生かされている存在なのです。

ところが、そのようなわたしたちが、人生を生きる中で、様々なことを経験し、弱さを抱

え、不安になり、人を、そして神を信じることもできなくなるようなこともあります。まさにそのようなときに、今度は復活の主イエスが、わたしたちの人生の真っ只中に来てくださり、そこにいてくださり、息を吹きかけておっしゃるのです。「あなたがたに平和があるように」と。そのシーンがヨハネによる福音書 20 章 19～23 節です。「その日、すなわち週の初めの日の夕方、弟子たちはユダヤ人を恐れて、自分たちのいる家の戸に鍵をかけていた。そこへ、イエスが来て真ん中に立ち、「あなたがたに平和があるように」と言われた。そう言って、手とわき腹とをお見せになった。弟子たちは、主を見て喜んだ。イエスは重ねて言われた。「あなたがたに平和があるように。父がわたしをお遣わしになったように、わたしもあなたがたを遣わす。」そう言ってから、彼らに息を吹きかけて言われた。「聖霊を受けなさい。だれの罪でも、あなたがたが赦せば、その罪は赦される。だれの罪でも、あなたがたが赦さなければ、赦されないまま残る。」

ここでは弟子たちの心境がはっきりと表現されています。「ユダヤ人を恐れて…」恐れの中でいる弟子たちがいます。ここより前の場面でペトロともうひとりの弟子はイエスさまの遺体が収められていた墓の中に入り、イエスさまがそこにはおられないことを確認しています。さらに、マグダラのマリアから復活の主が彼女に会って話されたことの報告も受けていました。けれども「彼らはマリアから報告を受けて心躍り喜び感謝の礼拝をした…」という展開になるのではなく、恐れ、不安のあまり、家の戸に鍵をかけていた…となっているのです。その只中に主イエスは来てくださり、その第一声が「あなたがたに平和があるように」なのです。この訳は口語訳聖書では「安かれ」となっています。自分のことを裏切り、今また自分と同じようにされることを恐れ、家の戸を、そして心の扉の鍵をかけてしまっている弟子たちを諫めるどころか、計り知れない大きな愛によって赦し、語りかけるのです。

「安かれ」と。主イエスはこの「安かれ」「あなたがたに平和があるように」を繰り返されます。「あなたがたに平和があるように。父がわたしをお遣わしになったように、わたしもあなたがたを遣わす。」これは派遣命令です。その際とても重要なことをなさっておられます。彼らに息を吹きかけて言われた。「聖霊を受けなさい。…」その「聖霊を受けなさい」のあとに続けて発せられる言葉にまた大きな意味があるのです。「だれの罪でも、あなたがたが赦せば、その罪は赦される。だれの罪でも、あなたがたが赦さなければ、赦されないまま残る。」イエスさまはまず自らを裏切った弟子たちを赦し、彼らの中に平安が満ちるようにと行ってくださいました。そして聖霊を受けることを通して、あなたがたは平和を・赦しの愛を作り出す者とされる、そのような者として人々の中へあなたがたを遣わすとおっしゃっているのです。

そして今日の礼拝の3つ目のテキストに繋がります。「2度あることは…」の3度目のシーンです。「五旬祭の日が来て、一同が一つになって集まっていると、突然、激しい風が吹いて来るような音が天から聞こえ、彼らが座っていた家中に響いた。そして、炎のような舌が分かれ分かれに現れ、一人一人の上にとどまった。すると、一同は聖霊に満たされ、「霊」が語らせるままに、ほかの国々の言葉で話した。」

先ほどもお話しましたように、復活の主イエスは弟子たち、ひいてはわたしたちが、疑い、

迷い、不安にあり、揺らいでいても、すべてご存知の上で、その只中にいてくださりながら、派遣して下さったのでした。その後の弟子たちの様子が五旬祭の日の出来事を通して描かれています。五旬祭の日というのは、ユダヤ教の過越しの祭りから数えて 50 日目にあたります。ギリシア語で 50 日目、50 番目を表わす単語がペンテコステという単語なので、この日のことを特にキリスト教ではペンテコステと呼ぶようになりました。主イエスの復活から数えて 50 日目でもありました。弟子たちはみな集まっています。あの派遣命令を受けた弟子たちが一緒に集まっています。「五旬祭の日が来て、一同が一つになって集まっていると、突然、激しい風が吹いて来るような音が天から聞こえ、彼らが座っていた家中に響いた。」「激しい風」というキーワード。英語の聖書では a violent wind、バイオレンスなんです。物凄い風、それこそ突然の激しい風なので、突風です。「激しい風が吹いて来たような“響き”」なので、実際の風というよりは、そのような響き、「ピューッ」では弱く、「ゴーツ」なのではないでしょうか。しかもその音が彼らがいた家中に響き渡ったのです。もしこの空間に今そのような音が響きわたったらどうでしょう。やはり恐怖でしょうね。しかもその続きはなんとも不気味な描写です。「そして、炎のような舌が分かれ分かれに現れ、一人一人の上にとどまった。」この表現のままを聖書の授業で生徒たちに「べろみみたいなものが、この教室にいる一人ひとりの頭の上にべろん、べろんってとどまったら…どう？」言うと、「うわぁっ、気持ち悪い」それで終わりです。ここで「舌」と訳されている単語には「言葉」という意味もあること、さらに「炎」という単語からはその激しさがイメージされると同時に聖書においては、そこに神さまの存在があることを示すことを伝えると、なんとなく理解してくれるようになります。つまり神の導きによって言葉が備えられ、「すると、一同は聖霊に満たされ、“霊”が語らせるままに、ほかの国々の言葉で話した。」と繋がっていくのです。

わたしたちは生まれたときに命の息を吹き入れられてこの世に生かされた者として存在します。そして人生を生きるそのプロセスにおいて喜びも悲しみも、極端に言えば信仰も不信仰も経験します。そして死をも意識するほどの辛いまさにそのようなとき、復活の主が会ってくださり、「安かれ」と（口語訳）語りかけ、再び息を吹きかけてくださり、「聖霊を受けよ」（口語訳）と力強くお命じくださって、再びこの世へと、人びととのつながりの中へと送り出してくださいます。そしてその人生を重ねる途上であって、折に触れて、今度は「息」という日本語は出てきませんでしたが、まさに、「激しい風」、「炎」という描写がなされるまでの力強いエネルギー＝生きる力を含み持つ「聖霊」を送ってくださり、神が、主イエスがわたしたちの与えられている人生において常にともにいてくださることを思い出させてくださるのです。ちなみに、ここで「風」、「聖霊」と訳されています単語は旧約聖書原語ヘブライ語では「息」の意味を併せ持ち、「神がわたしたちに注ぎ続けてくださっている生きる力」を表わすのです。

誤解を招いてしまっただけではないので、今さらですがお断りしておきます。聖書において聖霊が注がれるのは 3 回あるというわけではありません。もっともっと聖書に登場しますし、それこそ、何度となくわたしたちは、気づくと気づかざるとに関わりなく、聖霊を注ぎ

続けられ、守られ、導かれているのです。そのことを分かちあうことが出来ればと思い、今日は象徴的なシーンを取り上げてみました。

わたしたちの人生の中で出会ってくださっている、わたしたちの人生の出来事・出会いのすべてにおいて見守り、共にいて、導いてくださっている神・主イエス・聖霊。そのことを思い描く人生での場面、わたしたちの人生において、神・主イエス・聖霊による救いの出来事があるシーンは、考えてみると、－（マイナス）の状況であることが少なくないかも知れません。創世記の天地創造の特に 1 章、闇があつて「光、あれ」と神がおっしゃる背景には、イスラエルが他国に攻め滅ぼされ、国を奪われてしまった、そんなところに神は必ずあらたな生きる希望を与えられるという信仰と歴史的背景があると考えられていますし、それを受けて創世記 2 章の大地のちりで形造られた人に命の息が吹き込まれるというのはまさに神による生きる力の注ぎ込みと言えます。ヨハネによる福音書では復活の出来事を信じ切れぬ弟子たちに不安な心がありました。そして使徒言行録では弟子たちが集まって祈っていたところに突風です。恐ろしくなかった訳がない！いずれも－（マイナス）の状況がありました。でもそのいずれもにおいてその中からわたしたちを救い出したり、導き出したりしてくださる出来事の証が描かれているのです！－から＋への神による・主イエスによる・聖霊による転換です。だからわたしたちは、そんな神さまに、イエスさまに、聖霊に感謝し、委ね、祈りつつ共に歩むことのできる仲間、共同体であり、そのようなつながりを・安らぎを・作り出す一人ひとりとして歩むことが望まれているのだと思うのです。

このように繰り返し、息を・聖霊を・生きる力を、この世に命与えられたときから注がれているわたしたちです。それはわたしたちが完璧な人間だからというのではなく、むしろ疑い、迷い、躊躇う、弱い存在であつてもなお、神さまが・イエス様が共にいて大きな愛で守り、支えてくださり、生きることできるように導いてくださっている。2 度や 3 度ではなく、何度となく。だから安心して、委ねて、祈って、共に生きていくことができるわたしたちでありたいと思うのです。神さまは、今尚そうして生きて働いてくださっているのです。イエスさまが共にいて、聖霊が守り導いてくださっているのです。これからも神さまの愛、主イエス・キリストの愛に包まれて、聖霊に導かれて歩んで行くわたしたちでありたいと思います。

(2024 年 7 月 10 日)